

佐多 稲子

平林たい子

佐 多 稲 子
平 林 たい 子

佐 多 稲 子
平 林 た い 子

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162
印刷所／株式会社三秀舎 製本所／神田加藤製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス・日本クロス工業株式会社

目次

佐多 稲子

キャラメル工場から

五

くれない

一七

灰色の午後

一九

平林たい子

こういう女

二五五

砂漠の花

二九七

注解

五五三

年譜

五六一

解説

五八三

佐々木基一

佐
多
稻
子

キャラメル工場から

一

ひろ子はいつものように弟の寝ている布団の裾をまくり上げた隙間で、朝飯を食べ始めた。ああ黒い小さな顔がまだ眠そうに腫れていた。台所では祖母がお釜を前に、明かりにすかすようにして弁当を詰めていた。明けがたの寒さが手を動かしても身体中にしみた。どこかで朝の仕度をする音が時たま聞えた。

ひろ子は眉の間を吊りあげてやけに御飯をふうふう吹いていたが、やがて一膳終るとそそくさと立ち上がった。

「おや御飯は」

「おしまい」

ひろ子はもう火鉢の抽出しから電車賃を出して

た。

「おしまいじゃないよ。もう一杯食べといて、まだ遅くなりゃしないから。さあ」

「だって急いで食べられない」

祖母の手に茶碗を渡してやりながらひろ子は泣声を出した。

「急いで食べられないって前こんな寒い日に熱い御飯でも食べなきゃこごえてしまうよ」

「だって遅くなると困るんですもの」

つい四、五日前に彼女は初めて遅刻した。だが彼女の工場には遅刻がなかった。工場の門限はきっちり七時であった。遅れた彼女はその日一日を嫌応なしに休ませられた。彼女達の僅かな日給では遅刻の分を引くのが面倒だったから。

その朝彼女は電車の中で遅れそうなことを感づいた。身ぎれいな女などが乗り始めていて労働者風の姿が消えていた。彼女は車内の空気で時間を見ようとするように落ちつきなく目を走らせた。彼女はとうとう、入口まで出て行った。その時其処に吊り下がっていた割引の板札を、片手で胸から時計を引出した車掌

がまくり上げてひっかけた。

あたりが、変ったように思われた。電車はひろ子が下りる停留所の一つ手前までもう来ていたのに。停留所のちょっと手前に電車道に沿うて、彼女の工場の赤煉瓦が長屋のように横につづいて、その中の一つに彼女の入口があった。ひろ子は見落すまいと、その一つ一つの入口を見つめた。押されるような何かかけまわるような厭な腹痛を覚えた。

彼女は電車から入口へ駆けつけた。そして電車で見え通りだった。

彼女が家を出たのは暗い内だった。彼女の電車賃は家内中かき集めた銅貨だった。だが彼女の前には鋼鉄の鉄戸が一ぱいに下りていた。彼女は間に合わなかった。工場の門限は七時だ。彼女は、コソコソとそこを通りぬけた。彼女はマントの下で弁当箱を両手でしっかりと抱いてそれで胸の上をぐっと押さえて歩いた。彼女はベソをかいていた。人通りが多くなっていた。往来は彼女の朝から別の朝へ移っていた。

ひろ子はこえるよりも遅刻がおそろしかった。

祖母に咎められながら朝食をすませたひろ子は、襟

巻に顔をうずめて、戦さに行くような気持ちで歩いて行った。外は研ぎ立ての包丁のような夜明けの明かるさだ。そしてきしむように寒い。橋の上では朴鹵が何度かすべった。

まだ電灯のついている電車は、印絆纏や葉葉服でいっぱいだった。皆寒さに抗うように赤い顔をしていた。味噌汁をかきこみざま飛んでくるので、電車の薄暗い電灯の下には彼らの台所の匂いさえするようであった。

ひろ子は大人達の足の間から割り込んだ。彼女も同じ労働者であった。か弱い小さな労働者、馬に食われる一本の草のような。

「感心だね、ねえちゃん。何処まで行くんだい」

席をあげてくれた小父さんが言葉をかけた。

「お父ちゃんはどうしてんだい」

「仕事がないの」

ひろ子はそれを言うのが恥ずかしかった。

「おや、あそんでるのかい。そいつはたまらないな」

そう言って彼は親しげな顔付きをした。その車内では周囲の痛ましげな目が一斉に彼女の姿にそがれは

しなかった。彼らにとってはそれが自分達自身のことであり、彼女の姿は彼らの子供達の姿であつたから。

二

彼女の父親はある小都市の勤人だつた。綿の洋服を着て俱樂部で球を撞いた。三、四年患つて死んだ、妻のまだ存命中に彼は僅かの不動産も無くなした。二度目の妻と結婚すると彼は、變にプチブル的な生活にあらがれるようになった。二度目の妻は琴と生花を、彼の会社の重役の家庭へ教えて回つた。そして彼の尺八に合せて合奏した。一時彼は子供二人と母親とを放擲して妻の実家にはいつた。やがてお体裁がそれを許さなくなつた。子供達は中学校へ入れねばなるまい。彼の収入がそれに堪えるだろうか。勤人では一生うだつが上がりつこない。彼は彼らが何をやろうと一生うだつが上がりつこないかありはしないことを知らなかつた。彼は一家をまとめて上京した。二度目の妻との離別がその決心を固め、東京で苦学している弟の病気がその実行を早めた。しかし彼の上京は、お体裁やの彼の周囲から逃げ出したのであつた。方針や計画は一つ

もなかつた。

彼は酒を飲み、どなり散らして家族に當つた。彼の弟は他家をついで自分の学資だけを持つていたが、それを保管していた兄が駄目になつたので苦学した。不慣れた労働が彼を倒した。彼は床について起き上がらなくなつた。

上京後のひろ子の一家は病人をかかえて寸詰りにまつていつた。父親はその間にビール会社の人夫になり、仕出し屋の雑役夫になつた。それらの仕事が手近にあつたから。それも肩が腫れ足がむくみそして止めた。祖母の内職では仕ようがなくなつた。その時ひろ子は五年生だつた。

「ひろ子も一つこれへ行つて見るか」

ある晩父親がそう言つて新聞を誰にもなく投げ出した。茶碗を持ったまま新聞を覗いたひろ子は、あまり何気なさそうな父親のその言葉にまどつた。あのキャラメル工場が女工を募集していた。ひろ子はうつむいてしまい、黙つてむやみに御飯を口の中へつめこんだ。誰も黙つていた。

「どうした、ひろ子」

しばらくして父親はそう言つて薄笑つた。

「だつて学校が……」

そう言いかけるのと一緒に涙が出てきた。

「まだお前、可哀想に……」

「あなたは黙つてらっしゃい」

父親が祖母を頭からおつかぶせた。ひろ子の弟がなぐさめ顔で時々そつとひろ子をのぞいた。床の中で病人は仰向きに目をつぶつていた。

あくる日ひろ子はその工場の事務室に、事務員と父親との交渉の間ぼつんとほうり出されていた。

「十三、あそうですか」事務員は名前や何かを書きとつた。

「まだほんとの子供でいろいろ御面倒ですが」

「はあ、いや、それでここの規則はこれになつていますか」

事務員は父親の個人的になりそうな話を遠慮なく撥きながら話を進めた。

かえり道で父親はひろ子を蕎麦屋へ連れてはいつた。前ごみに胡坐をかいて低いお膳の上で酒をつぎながら父親は上機嫌だった。

「すこし道が遠いけれど、まあ通つて御覧。学校の方はまたそのうちどうにかなるよ」

実際その工場までは電車だけで四十分はかかるはずだった。だがそれよりも彼女の日給で電車賃をつかつては間しやくに合わないのであった。女工達はみな徒歩で通える所に働き口を探す。でなければ大工場へ住み込んでしまふ。しかしひろ子の父親はそんなことは考えなかった。その工場の名がいくらか世間へ知れていたもので、そこへ気が向いたにすぎなかった。ひろ子は次の日からしよぼしよぼと通つた。

三

「光ちゃん、あんたもう三つ出来て？」

「ううん、まだやつと二罐、あんたは？」

「あたいもさ、手がかじかんで……」

二十人ばかりの娘達が、二列にならんだ台に向かい合ひに立ち、白い上着を着、うつむきになつて指先を一心に動かしながらおしゃべりをしていた。みんな仕事の調子をとるために、からだを機械的に劇しく揺すつていた。

ひろ子はしょぼしょぼ目の娘と女工頭の妹の三人で、新しい年の者だけが一組になって一台持っていた。三人はみんなから離れて室の片隅で、手元がまだ定まらないらしい調子で小さな紙切にキアラメルをのせた。

「みんな早いね」

ひろ子は目のしょぼしょぼした隣りの娘に話しかけた。

「だってあの人たちは古いんでしょ」

「そうよ。当り前だわ」

女工頭の妹が小声で言った。この娘はからだが瘦せて小さく、口が尖っていて大人みたいな顔をしていた。

ひろ子の隣りにいる娘はトラホームでいつもかなしそうに目がしょぼしょぼしていた。身体は小さく萎びていた。

みんなの方では一人が流行歌を唱い出して、あとをついたり、合の手を入れ合ったりした。ひろ子はやつと幾つか出来た紙箱を積んで数えていた。事務員が二枚の半紙を両手に吊り下げてはいって来た。ひろ子の

見覚えのあるいつかの事務員だった。

「今日は誰か知ら？」

「たいがい定まってるわ、お梅ちゃんよ、きっと」

「あたかも昨日はずい分したんだけどなあ」

その間に事務員は一方の壁の所で、一枚を女工頭にもたせて置いて背のびをしながらそれを貼りつけた。

前日の成績表だった。優等者三人と劣等者三人の名が毎日貼り出されるのだった。

「やっぱりそうね」

「お梅ちゃんにはかないっこない！」

「しっかりやらなきゃ駄目だぞ」

事務員がからかうように、にやにや薄笑った。ひろ子は誰かが読み上げる自分の名をききながら顔を上げなかった。勝気らしい島田の女工頭が妹に、無愛想に「あんたもしっかりしなきゃ駄目よ」と言っているのが聞えた。

ひろ子は学校のことを思い出していた。学校でも彼女はいつも貼り出された。だが学校では劣等者は別に貼り出さなかった。

ひろ子はどうかして早く仕事が上手になりたかつ

た。他の娘達が五罐こしらえるうちにひろ子は二つ半しか出来なかった。いつもより出来たと思う日でも最後の時間になるとやっぱり二つ半だった。

ひろ子はあせった。どうかして劣等者の名前からだけでもぬけたかった。

みんなは盛んに仕事をつづけた。それは競争だった。彼女達はその成績表貼り出しを目あてにその小さなからだを根限り痛めつけた。

四

彼女達の仕事室の裏側は川に面していた。その室には終日陽が当らなかった。室の入口は工場内の暗い通り路になっていて、明かりは川の方の窓からしかはいらない。窓からは空樽あきだるを積んだ舟やごみ舟等始終のろのろと動いているどぶ臭いその川を隔てて向岸の家のどたごたした裏側が見えていた。

それらのすすばけた屋根に石鹼や酒の広告板が立ててあり、その広告板には一日中陽が当たっていた。その陽の光は幸福そうであった。閉め切った硝子戸ガラス戸越しにその暖かそうな色だけが見えた。暮れる前には弱々し

い赤い色がはすかに硝子窓のよぐれにちよつと映り、間もなく消えた。すると室の中がすっかり暗くなった。この頃は毎日風が吹くので一日中その硝子戸ががたがた鳴り一枚の破れた穴からは遠慮なしに風が吹きこんだ。その穴の修繕をもうこの間から申込んであるのにまだそのままであった。

彼女達はまる一日その板の間に立ち通して仕事をした。それに慣れるまでにはみんな足が棒のように吊つてしまい、胸がつまって眩暈めまいを起すものがあった。夕方になると身体中がすっかり冷えて腹痛を起すものもあった。彼女達はみんな腹巻をして、父親のお古の股引を縮めては穿はいていた。

五

昼前になると彼女達の一人が待ち兼ねて言い出した。

「もう温めてもいい頃じゃない？」

「早くしないとよくあったまらないことよ」

「お願いよ。あたいのもついでに出しといてさ」

「あたしのね。紫の風呂敷」

間もなく火鉢の周囲がアルミニウムの弁当箱で一ぱいになった。朝六時につめられた弁当はニウムの箱の中でぼろぼろに凍っていた。火鉢のまわりでは彼女達らしい色々の不平が出た。

「うちの母さんまた赤ん坊生むのよ。赤ん坊なんてあたいうたくさんだよ——だって家へ帰ったってお守りばかりさせられるんだもの。奉公した方がよっぽどいいわ」

「お正月だってあたし何にも買わないのよ。つまらないわ」

「あたしでもいい切って奉公しようかと思うわ。あたしんとこじゃ母さんだけでしょう働くのは、だからもつとおあしのはいる工夫をしなくちゃ」

「お酌になるの？」他の娘がのぞきこんでたずねた。

「あら、お酌なんかにならないわ」

「そう、ただどうちの姉さん、家へくる時いつでもいい着物着てくるわよ」

「いやあだ、いい着物なんか着たかないわ」

ひろ子とトラホームの娘はそういう会話をみんなのように立って聞いていた。ひろ子はトラホームの娘に

小声で聞いた。

「学校へ行きたくない」

「私目が悪いから駄目なの」

三時になると彼女達はお八つを食べた。それは彼女達の僅かな日給の中から出された。それはいつも一銭に決まっている焼芋に限られていた。

ひろ子は最初の日にその一銭を持っていなくて恥ずかしい思いをしてから、その後はきつと一銭だけは持つて来た。使いには順番で二人ずつ出かけた。それだけは外出をゆるされていた。

工場の向かい側は古着屋が軒なみにならんでいる通りで、あつしやとんびが風に吹かれて舞っていた。白い上衣をきてまくり上げた裸の腕を、前だれの下に突っこんで、ちちかんで歩く彼女達の姿は、何処か不具者のように見えた。

六

女工たちが包むキャラクターは別の室で造られた。それを大きな箱に入れて男工たちが持つて来るのであった。

「今日はレモンよ」

「ほうらね。さつきから匂ってたんですもの」

粉にまみれた裸のキャラメルが台の上へ音を立てて流れた。甘いレモンの匂いがあがった。レモンのキャラメルが造られることはそう度々なかった。それが工場主にとって損だったから。自分達の扱う菓子が自分たちの好きなものだということが彼女達を嬉しがらせた。そのレモンキャラメルが、やがて店に出ていって子供達を喜ばすだろうように。

彼女達はキャラメルのかけらなら食べてもよいことになっていた。ひろ子もトラホームの娘もそれを拾って食べた。

「あら、あんたいくらかけらだってそんなに食べるとおこられるわよ……」

その意地悪の女工頭の妹が急にびよこんと頭を下げた。ひろ子は初めて顔を上げてふりむいた。工場主の奥さんが見まわりに来たのであった。

「お寒うございます」

「お寒うございます」

みんなが口々にそう言ってお辞儀をした。工場では

毎日工場主か、でなければ奥さんが見まわりに来た。

二人揃ってくることもあった。

奥さんは黙って室のまん中へ来て立ちどまった。彼女は大島の重ねをきて後手をしていた。後には可愛らしい小間使が従っていた。小間使は奥さんの傍近く用を足すので身ぎれいにさせられている。女工頭が傍で何かお愛想めいた報告をした。奥さんはふんふんと顎で聞いた。

彼女はそこで満足げに北^{ほく}叟^{そう}笑んだ。——娘たちが相変らず柔順に働いていたから、そしてそれでも足りずに彼らは帛^{たもと}刻時間に門のところまで女工達一人一人の袂^{たもと}と懐^{ふところ}と弁当箱の中とを人を使って検^{しら}べさせた。みんなは番のくるのを吹き^き晒^{さら}しのなかに立って待っていた。

「ずい分いばっているのね」

奥さんの姿が出口から消えるのを見ながらひろ子はそうと隣りの娘にささやいた。

「あらおこられるわよ」

目をしょぼしょぼさせながら、その娘はひろ子が多^{おほ}く事情を知らないと思^{おも}ってたしなめた。

ひろ子はよその奥さんというものは、小さな娘たちに対しては笑顔ぐらい見せるものだと思っていた。

「お澄さんはいいわね。あんないい着物を着ていられた」

女工頭の妹が小間使を羨しがつて言った。ひろ子も女工頭の妹も目のしよぼしよぼしたトラホームの娘も、奥さんが現われるとそれぞれその方に気を取られた。

七

地下室の薄暗い通りにふみ板をふむ足音がひびいて天井の小さな電灯がゆれていた。彼女達がガヤガヤ言いながら下りていった。

お八つの時だった。女工頭がこれで今日は仕事がお終いだと言つて来た。

「また蠟洗い？」

「いやだなあ、寒くて」

「監督さん、今日はお湯にしてもらつてくださいな」

いつもキャラメルの仕事かと絶えたと化粧液の蠟洗いをさせられた。もともとその工場は化粧液が売出品

であった。

地下室の蠟洗いの場所が三和土になつていて、じめじめと水っぱかった。ふみ板の上では裸足の足が冷たかった。上の窓口から櫓の音が聞えた。

「まあ！ まるで水よ。お湯ないの？」一人がやけに大声を上げた。

二、三人がまたつづけてかん高い声を上げた。

「たまらないわ。こんな……」

「お湯もらいましようよ」

女工頭が困つたような顔をして、

「待つてらっしゃい、お湯もらつてくるから」

彼女は他の仕事場へ交渉にいった。

みんなは何かむしゃくしゃする気持ちを押さえて、その小さな蠟を一つ一つゆすいで行つた。少し水の外に手を出しているとびりびり痛んで見る見るヒビが切れた。すると彼女達はあわててその手を水の中へつっこんだ。

黙りこくつて蠟を洗っているひろ子の鼻先からみだり落ちてきた。

八

ひろ子が工場へ通い初めてから一カ月ばかりすぎた。

その日ひろ子のかえりの電車賃がなくなつて歩いてきた。これまでには朝も歩かねばならないことがあった。そんな時は祖母と一緒に歩いてくられて、二人が二時間近くも歩き、やっと工場の近くへくる頃行く手に当って街灯が一斉に消えるのだった。

この頃は歩くのにも慣れて来た。

八時を過ぎていた。家では閉めきつた六畳の間でみんなが内職をしていた。電灯の下で祖母の膝の上の毛編の帽子から祖母の手の動くにつれて、さっさと音を立ててこまかなきれいな毛が掻き出されていた。電灯の明かりにその茶色の毛くずが舞っていた。隅の壁ぎわでは病人が床の上に腹這つて緑色の紙にばらの花や小鳥などを絵の具で画いていた。雑記帳の表紙になるものだった。父親もその枕元で胡坐をかいて見本を見ながら手伝っていた。まわりには描き上げた緑色の紙が一ぱい拡げてあった。弟は祖母の後でさっきから目

を赤くして雑誌に読みふけていた。

ひろ子は台所側の障子のそばにお膳を出した。七輪の上で雑炊鍋が煮立っていた。壁一重へだてる隣りの鼻緒職の家からは、いつものようにとんとんと夜なべの音が、一軒の家の中のように聞えていた。

ひろ子は雑炊の湯気で赤くなつた顔を上げて言った。

「外から帰つてくると、こうして熱い御飯を食べるのが何よりの楽しみよ」

ひろ子は家へ帰つてくると一っぱしの働き手になつた氣であつた。

「はゝゝ、生意氣を——どうだねこの頃は、やっぱり二つ半かい？」

揶揄的な父親の言葉でひろ子は赤くなつてうつむいた。

工場ではこの間から日給制が止められて、一罐の賃金を数えるようになった。一罐七錢だった。

仕事に慣れた娘たちにとっては収入が多くなつた。

しかし大方の娘たちは、今日までの日給と同じ賃金を取るためにはもっともつとその身体を痛めつけねばな